

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32618

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12806

研究課題名（和文）道教から聖教へ 中国密教における喫茶文化の形成に関する研究

研究課題名（英文）From Daoism to Buddhism: A study on the formation of tea-drinking culture in Chinese esoteric Buddhism

研究代表者

張 名揚（CHANG, MINGYANG）

実践女子大学・研究推進機構・研究員

研究者番号：80850875

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、茶を供物とする中国密教星供について、「称名寺聖教」を手がかりに考察を行った。密教星供は道教など中国俗信を受容した上で考案された儀礼であるが、さらに探っていくと、隋唐期道教の星宿を祀るショウ（酉+焦）との関連が見られた。また、日本撰述の密教書によれば、茶を盛る星供の法具は「白瓷（シラシ）」とされているが、茶と「白瓷」の組み合わせは唐代中国の世俗文化と喫茶文化と一致することや、星供に行われる観想の内容には道教的要素が見られることも、考察を通して明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代社会に馴染み深い茶は、「茶禅一味」と言われるように、禅宗と結びつけて考えられることが多いが、喫茶文化と宗教はそのような単純ではなく、茶を用いる密教星供が、その一例といえる。密教星供ではどのように茶を供物として利用していたのか、また星供の儀礼はどのように形成されたのかを、寺院で生成される聖教を手がかりに、より具体的に考察していく点において学術的意義があると言える。さらにそれを中国密教や中国道教などと比較し、思想文化交流史における喫茶文化の伝承と変遷を明らかにする点に、本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study examines the Chinese Buddhist esoteric star offering, in which tea is offered, using the Shoumyouji shougyou 称名寺聖教 as a guide. The Buddhist esoteric star offering is a ritual that was devised after incorporating Chinese folk beliefs such as Daoism, but further investigation reveals its specific connection to the Sui-Tang period Daoist jiao {酉焦}; ritual's star offering. Furthermore, according to esoteric Buddhist texts compiled in Japan, the ritual implements used to hold tea during the Buddhist esoteric star offering are made of shirashi 白瓷. This study makes clear that the combination of tea and shirashi is consistent with the secular culture and tea-drinking culture of China during the Tang Dynasty, and that Daoist elements can be seen in the content of the meditations performed during the Buddhist esoteric star offering.

研究分野：中国哲学

キーワード：密教 道教 星供 「称名寺聖教」 喫茶文化 ショウ（酉+焦） 観想 法具

1. 研究開始当初の背景

平安・鎌倉期に撰述された密教書や、密教寺院で生成され伝承される資料群、いわゆる「聖教」には、供物としての茶の利用についての記載が見られる。こうした資料の大部分は、星供と密接な関係を持っている。

喫茶文化は中国から日本に導入されたものである。密教もまた、インドから中国に伝わり、変容を遂げてから、日本に伝来している。さらに、多くの先行研究によって指摘されてきたように、密教における星供という儀礼は、道教など中国の俗信の影響を受けており、道教の思想文化を受容した痕跡が顕著に見られる。したがって、日本に伝わる密教書や聖教に見える、茶を供物とする星供の理論と作法は、中国でその原型が作り上げられたと見て良いだろう。

茶を用いる密教星供が中国でどのように考案されたのかについて、筆者が注目するのは、密教が中国に伝来した時期、そして喫茶の風習が中国で広まった時期である。密教が、本格的に中国に伝来したのは唐代の開元年間(713~741)とされている。中国では早くから茶が飲用されているが、中唐・封演の『封氏聞見記』によれば、喫茶の風習が広まったのも同じ開元年間である。開元年間に茶が普及したのであれば、密教が本格的に中国に伝来した時期と、重なることになる。茶を用いる密教星供がどのように考案されたのか、その実態はどのようなものであったかを考える際に、唐代までの、中国社会文化の諸相と併せて考えなければならないのである。

中国の喫茶文化に関する先行研究は、数多く蓄積されている。しかし、その多くは文学作品に見える喫茶文化を中心とするものや、茶の利用史、すなわち唐代の煎じ茶・宋代の点茶・明清時代の泡茶という作法やその変遷を検討するものである。宗教思想史の角度から考察されるものもあるが、「茶禅一味」の影響を受けていたためか、禅宗の茶、およびそれに関係の深い茶道の概念が形成された時期以降を対象にする研究が多い。筆者が注目する、密教における喫茶文化の形成についての研究は、十分になされてきたとはいえない。

前述したように、日本の寺院に伝わる聖教には、星供の茶に関する記述が多く見られる。これらは、中国密教における喫茶文化の形成の考察にも有用である。近年「金沢文庫文書」に基づく考察によって、中世の喫茶文化における顕密寺院の重要性が示されている(橋本素子「鎌倉時代における宋式喫茶文化の受容と展開について 顕密寺院を中心に」、『寧楽史苑』46、2001 など)が、思想史的な視点から、特に聖教を用いた研究は少ない。一方、密教星供(武田和昭『星曼荼羅の研究』、法蔵館、1995 など)や、中国密教と道教との関わり(蕭登福『道教与密宗』、新文豊出版公司、1993。同『道教星斗符印与仏教密宗』、新文豊出版公司、1993 など)について考察するものはあるが、供物としての茶に注目する研究は少ない。また、茶と道教、特に道教と密接な関係を有する神仙思想・養生思想との関わりについて研究するもの(東君『茶から茶道へ』、市井社、1998 など)は多いが、道教經典に見える宗教儀礼に関する記述に沿って考察するもの、僅少と言わざるを得ない。

2. 研究の目的

中国では古くから飲用されてきた茶を、密教はどのように星供に取り入れたのか、また、この宗教儀礼は、唐代までの中国の社会、文化、そして宗教、特に星供と密接な関係を持つ道教とどのような関係を持っていたのか。この問題を、日本に伝わる密教書や、日本の密教寺院で伝承されてきた聖教を手がかりに解明することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究では、理論と作法という二つの側面から、中国密教における喫茶文化の形成について考察する。主に次のような方法で研究を進めていく。

(1) 「称名寺聖教」における星供関係資料の整理

密教星供について述べる中国の資料が少ないため、本研究では日本に伝わる資料を手がかりに、特に「称名寺聖教」を主として考察する。これは、2019年度の科研費研究課題「「称名寺聖教」を中心とした中世日本における喫茶文化の受容に関する研究」(19K23020)に続いて行われるものであり、具体的には以下のような方法をとった。

文化庁文化財部美術学芸課編『称名寺聖教目録』(同、2006)に基づき、「称名寺聖教」における星供関係の資料を抽出する。

『大正蔵』密教部などの中日仏書に収められる星供についての記述を抽出する。

の作業によって抽出された関係記述を対照しながら内容の異同を確認する。

以上に過程を経ることによって、日本に伝わる星供に関する思想の受容状況を確認していく。

(2) 唐代までに成立した中国の関係資料の整理

密教が本格的に中国に伝来する時期と喫茶文化が隆盛する時期が、ともに唐の開元年間であるならば、茶を供物とする星供を考察する際に、唐代までの中国社会文化の諸相を確認する必要がある。特に留意したいのは以下の二点である。

道教經典の記述

密教星供が、道教などの俗信を受容して考案されたものであることは、すでに多くの先行研究によって指摘されている。したがって、隋唐期までに成立したとされる道教文献、またはそれに関係する資料に見える儀礼の部分について精査する必要がある。茶を供物とする密教星供の理論について、本研究では思想史の視点から、道教存思と密教星供の観想の部分について分析する。また星供の作法について、道教の諸神を祀る「醮」の供物と密教星供に用いられる供物を対照しながら考察を行う。

世俗文化に言及する記述

密教星供が道教などの俗信を受容して成立したのであれば、唐代の世俗文化との関わりにも注目しなければならない。本研究では、密教星供の作法の一環として、供物としての茶を盛る法具を考察する。実際、平安後期に伝わる密教書によれば、供物としての茶を入れる法具を「白瓷」と指定している。「白瓷」は古くから中国では利用されていたこと、「白瓷」と茶の組み合わせが唐代の詩文に確認できることなどから、法具としての「白瓷」は中国の世俗文化の影響を受けた可能性が浮上する。本研究では、唐代の世俗文化を反映する史書・詩文ないしは考古資料も利用し、密教儀礼の作法に関する法具について検討していく。

上記の研究方法で、それぞれ中国唐代までに蓄積された思想文化と対照しながら、密教星供における中国思想文化の受容・変容の過程を明らかにする。

4. 研究成果

本研究は、「称名寺聖教」に見える星供関係の記述を手がかりに、茶を用いる中国密教星供の形成について考察を行った。その成果は、主に次の三点にまとめられる。

(1) 隋唐期道教の醮と密教星供との関わり

道教の「醮」の対象は様々であるが、『隋書』経籍志などの資料によれば、初唐期までは星宿を祭る「醮」が代表的なものと理解されていた可能性が高い。星宿を祭る「醮」の供物は多種多様であるが、初唐期は、干し肉と酒から、干し棗と「香水」と称されるものによって変わっていく傾向にあった。干し棗の利用は、神仙思想を吸収した中国古代の祭祀儀礼と一致し、密教書にも干し棗について神仙思想に富む記述が確認できる。「香水」について、密教星供では銭・茶・菓（干し棗）を供物として多用すること、茶の香りを持つ飲料としての性格、中唐期まで続いていた茶の名称の混乱などと併せて考察すると、「香水」は茶を指すと考えられる。

干し棗と、茶と見られる「香水」が供物として一組とされていること、初唐期まで道教の「醮」には星宿の信仰が大きな割合を占めていたことを考え合わせると、星供を記す密教書の記載が、初唐期道教の「醮」における供物の変化と類似していると指摘することができる。一行（683～727）に仮託された『七曜星辰別行法』の供物のほとんどは、早期道教の「醮」にもよく用いられる干し肉と酒であり、ごく一部の星宿への供物が茶である。現在伝わる星供の次第を記す密教書には酒と干し肉の利用がほとんど見られず、茶と干し棗を多用するため、『七曜星辰別行法』は、干し肉と酒から干し棗と茶に切り替わっていく段階に形成した道教文化を間接的に受容したものと考えられる。本書は、密教星供を示すものとして、また道教の「醮」と密教星供の交渉状況を解明する手がかりとして、注目に値する一書と言えるだろう。

(2) 密教星供の観想における道教的要素

密教の観想には、道教的な要素を見出しうることは、すでに複数の先行研究によって指摘された。すると、そもそも道教的色彩が濃厚に見られる密教星供における観想も、道教思想との類似が見られるはずである。本研究では、称名寺所蔵「本命星供略次第」（「称名寺聖教」318 函 120 号）において理論的な記述の見られる「道場観」の部分と道教經典と対照しながら考察を行った。

その結果「本命星供略次第」にみえる、「赤色の光」によって穢れが焼き尽くされるという淨化論、文字による事物の生成論、「七宝莊嚴ノ宮殿」という文字の表現や、諸星が三尊格を巡って敬礼するという動的描写などは、唐代以前の道教思想と存思との類似が見られる。「本命星供略次第」が、直接的に道教を取り入れたということにはならないが、密教星供は道教など中国俗信を受容して生まれたとされること、唐代に最盛期を迎えた密教が中国を介して日本に伝来したことから考えると、「本命星供略次第」に六朝隋唐期の道教思想との一致が見られても不思議ではない。むしろ、こうした共通点によって、現存資料の少ない中国密教星供を構成する古層的な部分を照らすことが可能となる。密教星供が成立していく上で、どのような道教思想を借用したかを考える際に、これらの共通点が参考となるはずである。また、「本命星供略次第」は密教星供に多用される供物としての紙銭についての詳細な記述がみられることなどから、作法の考察においても有益な資料であることがわかった。

(3) 星供に用いられる法具に見える中国世俗文化の色彩

平安後期に成書した、覚成(1126~1298)記・守覚(1150~1202)輯『沢鈔』を写した「沢抄第八 星宿」(「称名寺聖教」260 函1号8番)では、「白瓷(シラシ)」が茶を入れる星供の法具とされている。「白瓷」の使用は、『覚禅鈔』などの密教書に見える規定、すなわち息災法のシンボルカラーは白色ということと一致しているが、その背景には、密教が成育した唐代中国の世俗文化も存在していると言える。

白瓷碗は、空海(774~835)が訪れた密教の根本道場である青龍寺(陝西省西安)や、空海も善無畏(637~735)もかつて住した西明寺(同)などの寺院を中心に、多数出土している。これらの白瓷がどのような場面で利用されていたかは不明であるが、中・晩唐期に封閉されたと考えられる法王寺(河南省登封北部)2号塔地宮からは、供物壇の左右に置かれた白瓷碗が発見されており、少なくとも中国では白瓷を供養具として使用していたことがわかる。

白瓷の使用状況にも注目する必要がある。密教法具は金銅製のものが多いが、白瓷を代用品として使用することも可能であった。唐代に伝わった施餓鬼に関する儀軌のうち、不空(705~774)の訳とされる『施諸餓鬼飲食及水法』(『大正蔵』巻21所収)に「若し銅器無くんば、白瓷も亦得たり」とあり、これは白瓷がある程度流通していなければ考えがたい表現と言える。また、中唐の李肇の『唐国史補』にも、内丘(現在の河北省内丘)産の白瓷は、身分の貴賤に関係なく広く使用されていたと記されている。さらに、詩文にも白瓷と茶の組み合わせがよく見出すことができる。

興味深いのは、『沢鈔』には「白瓷」とともに「白瓷の盤」を併せて使用するとある。『沢鈔』には星供の法具の器形が描かれていないが、「秘抄 北斗」(「称名寺聖教」261 函1号2番)などの壇図によれば、茶を入れる星供の法具の多くは、茶碗と茶托のように、受け皿の上に碗が載せられており、白瓷の茶碗とその受け皿である托を想起させる。托は、唐代には茶を喫する専用道具になっていたという指摘と併せて考えると、道教などの中国俗信を受容して考案された密教星供における「白瓷」は、密教法具としての性格よりも、むしろ唐代の社会風俗を反映する性格のほうが強いと言えよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 張 名揚	4. 巻 43
2. 論文標題 称名寺所蔵「本命星供略次第」に見える思想と文化	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 年報（実践女子大学文芸資料研究所編）	6. 最初と最後の頁 157-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/0002000160	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 張 名揚	4. 巻 42
2. 論文標題 隋唐期道教祭ショウ（酉+焦）と密教星供の供物	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 年報（実践女子大学文芸資料研究所編）	6. 最初と最後の頁 7-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002444	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 張名揚	4. 巻 38
2. 論文標題 《統高僧伝》 感通篇 訳注（八） 釈通達伝	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古今論衡	6. 最初と最後の頁 148-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 張名揚	4. 巻 347
2. 論文標題 「称名寺聖教」から見る密教星供と唐宋期の喫茶文化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 金沢文庫研究	6. 最初と最後の頁 14-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1．著者名 張 名揚	4．巻 40
2．論文標題 仙人と茶 中国から日本へ	5．発行年 2021年
3．雑誌名 年報（実践女子大学文芸資料研究所編）	6．最初と最後の頁 225-244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002238	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1．著者名 張名揚	4．巻 252
2．論文標題 「称名寺聖教」に見える「茶」と「茶」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中世日本の茶と文化 生産・流通・消費をとおして（アジア遊学）	6．最初と最後の頁 32-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 張名揚
2．発表標題 「天」に捧げる茶 「称名寺聖教」を手掛かりに
3．学会等名 茶の湯文化学会東京例会
4．発表年 2022年

1．発表者名 張名揚
2．発表標題 日本中世密教星供浅探 以「称名寺聖教」為例
3．学会等名 中央研究院歴史語言研究所公開講座（招待講演）
4．発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	台湾中央研究院歴史語言研究所			